

平安時代文學概説

植 松 安

序 説

桓武天皇の延暦十三年（紀元一四五四年）の平安食都から、後鳥羽天皇の文治二年（紀元一八四六年）に頼朝が總追捕使となつたまでの凡そ四百年間が平安時代である。政治史の上には遷都或は開幕を以て時代の變遷に區劃を立てる事が出来ようが、文學方面の事は明かに之と同一の變化をして行くわけではない。奈良の都を去つて、山城平安の京が創められたからといつても、文藝界の萬事が土地と共に直ちに變動したのではない。但し、國民が周圍の雰圍氣に依つて、政治上の變化と共に、趣味上の變動を次第に進めたには相違ないのである。隨つて平安時代の文學としてその特長を發揮し始めたのは、桓武平城の二帝を過ぎた嵯峨天皇の弘仁時代からであると見たい。

當代四百年の政治を左右し、國民を率ゐて日本國を荷つたものは言ふまでもなく藤原氏の一家一門である。古來政治上に格別の勢力もなかつたこの家門が、鎌足に至つて急に名聲を擧げ、次で皇室との姻戚關係を生ずるに至るや、その威望は旭日の昇る勢で、遂には人もなげに振舞ふ有様に至つたのである。

この世をば我世とぞ思ふ望月のかけたる事のなしと思へば

とある御堂關白道長の詠に依つても事態の大凡は察知する事が出来よう。而もこの藤原氏は古來文臣の家柄である。一面に於ては泰平無事の世態、建國以來の幾多辛い經驗を味得した昔は忘れ去られ、武具は徒らに粧飾に供せられるに至つた世態である以上、世俗一般に風流風雅の文筆に奔るのは當然の事であつたと云はなければならぬ。大伴物部の兩氏は既に衰へ、源平兩氏の如きも遠く都を去つて、地方にその潜勢力を養うてゐたのも、これ亦自然の勢力である。

抑々圓滿な人格は、理性と感情との平靜調和に成立つものであるが、國家も亦是と同じく國民の理性と感情とが整正調和した時が最も圓滿な文化の發達を見る時でなければならぬ、是は或は文武兩道の均等といふ事にもなるであらう。然しながら建國以來の我國の方針を見ると、この意味に於て二千六百年の間寧ろ武事を重んじた國家であると稱してもよい國柄である。

然るにこゝ平安時代の世のみは全く反對に、文事を重んじて理性はその影をひそめ、感情徒に昂揚して苟くも歌文を善くしない者は貴族の交を許されず管絃を解せざる者は宮廷に近寄る可らずといふ有様であつた様に見える。之には新都新政の執つて以て範とした唐の文化と云ふものも頗る影響して居るには相違ない。唐時代の人材登用は一に詩文にあつたのはいふに及ばず、全朝を通じて詩文萬能の時代と稱しても差支はないのである。故にわが平安時代に興隆した詩文の如きは、唐の詩文の影響を受けて實によく發達したが、この漢文學と相並んで國文學も亦燦爛たる花を咲匂はせた。

而して當代文學の背景となつた平安時代の社會は、後の鎌倉、室町、江戸の各時代が武士の社會であつたのに比して、全く宮廷を中心とする貴族の社會であつた。此の期間の地方庶民はあれども無きが如き有様で、政治も文教も悉く貴族の手に依つて料理されたと云ひ得る。この勢力を保有した貴族は果して如何なる生活を續けたのであらうか。

藤原氏は財政上には地方に莊園を占有して収入の増加を計り、宮廷に入つては初のうちこそ他の部族もあつて擡頭出来なかつたが、後には競争者がなくなつた爲に、同族相討ち叔姪嫉視し、兄弟墻に鬨ぐ有様とさへなつたのである。大臣・攝政・關白は人臣榮達の最上である。然も之を得るには皇室の外戚となるより他に途がなかつた。即ち當代の貴族は女兒を産む事を第一に要望し、之を後宮に入れる事を榮達の手段としたのであつた。乃ち娘を持つ親は相争うて女御更衣に進め、何とかして權勢を得ようものと競つた。これは當時の物語乃至歴史に十分に描かれてゐる。又人力を以て果す可らざるを果さうと願ふからには、勢ひ神佛の加護へと進むのは人情であるから三世因果の宿命説に囚はれて、此に又加持祈禱といふ事が流行した。之を以て見ても如何にその日常生活が優柔懦弱であつて、少しも剛健勇壯の風が無かつたかを了解し得るであらう。

此の如き世態人情、一面の醜惡、それは遠慮なく文學に曝露されてある。これこそ特に注意すべき點である。

前述の次第に依つて、後宮の勢力が世の中に非常な位置を占めた事は想像に難くあるまい。一方、文事を以て人材の計器としたのであるから、才媛を殿上に召してその仕へる中宮・女御に光彩を放たしめんとした親心は當然で、紫式部と清少納言との對照は既に誰もが知る所で、世は只花やかな櫻花の満開に酔うて、散るの早き夕を知らぬ有

様であつた。

國文學史を通じて、男子をして後に墮若たらしめた様な才媛は、他の時代にもないではないが、當代は著しく才媛輩出し、平安時代の文學は女流の文學であると極言してもさして過言ではない。是は當代に假名文字が大に流布し、堅苦しい漢字漢文を男子が、優しい假名文字を女子が用ゐたといふ事にも原因する。

さて當代の文學を概観するに、漢文の隆盛は前代から延いて當代に及び、嵯峨天皇の弘仁期の如きは正に漢文隆盛の極致であつたが、醍醐天皇の御代、遣唐使が廢せらるゝに及び、在來の唐土心酔の熱は漸次さめかゝつて來て、一方その反動として國文學は非常な勢を以て發達するに至つたのである。即ち散文には、物語・隨筆・日記・紀行の如きもの、而して韻文には和歌はもとより、今様・神樂歌・催馬樂が生れ出た。その内容に至つては、よく融合調和されて豊富になつて來た固有の思想に、儒佛二教の思想が面白くあらはれてゐる。外國語の影響は自ら國語の音韻或は組織の上に多少の變化を及して、之を前期奈良時代に比すれば、更に複雑の度を高めたものがある。假名の發生については、確然とその時を指すわけにはゆかないが、當時愈々行はれて益々國文の上に便宜を得るに至つた。即ち全く假名のみで綴られた純粹の日本文學が生れた事は特に注意すべき事である。そして平假名の發明は、かきが、の美を生んで平安時代には假名書きの名手が輩出したのである。

以下類に従つて説明を試みよう。

一、散 文

平安時代の散文と見るべきものゝ種類は、

物語・歌序・日記・紀行・隨筆・雜史

等である。漢學の獎勵がやんで、假名の流行が廣くなつた平安時代の中期前後は、まさに國文全盛の時期である。これまでに見ない多様の文學形式を生んだ事も盛大の表徴であるが、それは一般が漢文學に精通したと同時に、この時代の思想が複雑になつた爲と云ひ得る。我國の文章文體はこの頃に至つて始めて整然たる一體をなしたといつても差支ない。文體の整理は雜事業である。論難提議、何れも多少の効果はあらうが、而も歸結する所は文學者作家その人の力である。明治の初葉、早く言文一致論が叫ばれたが、之を大成したのは學者でも政治家でもない。實に小説家の手になつたのである。同様に奈良時代以來混沌たる有様にあつた文脈は、まさに平安時代一流の作家の手によつて和文そのものを成就せしめた。而もその一導火線はまさに女流にある。

物語には多くの大作があるが、最も有名なのは紫式部の源氏物語である。

歌序は古今集序に優るものはない。

日記には貫之の土佐日記、菅原孝標女の更科日記、道綱母の蜻蛉日記、和泉式部の日記、紫式部の日記等がある。土佐日記・更科日記は紀行として扱ひうる。

隨筆としては清少納言の枕草子。

雜史としては赤染衛門の榮華物語、藤原爲業の大鏡がある。平安時代の國文・散文を論ずる場合忘れてはならぬ作品である。

○物 語

1 源氏物語

まだ明けそめぬ宇治川の邊に、瀬鳴の音を氣も遠さかる程に恐ろしく聞きなし、やるせない身一つを扱ひかねて入水を試みたのは浮舟の君である。それが薰大将にとつては嘗ての熱愛した懸想人に酷似した浮舟の運命である。やるせない浮舟の身してみれば、餘りにも身分の高い薰大将——然も匂兵部卿の熱烈な息にも浮舟は胸を焦がしてゐた。それとこれと何れは浮舟を苦しめるもの、思に堪へきれず宇治川の瞬間に立つたのである。幸かあらぬか浮舟は横川の僧都に救はれ、尼となつて嘗ての社會とは全く消息を絶つたまま淋しくも靜かな生活を送る事となつた。一方では浮舟を知つてゐた總ての人々と同じく、薰大将とて浮舟は早この世の人でないと思ひ歎いた折なのに、はしなくもこの消息を聞き挟んだ大将は、早速人を介して文をやつたけれど何の反應もない。或は又他家へ匿まはれたものではなからうかと惑はすのみ。浮舟の君は一人靜かに生きて行く。

以上が源氏物語の結末である。源氏五十四帖、二部に分つて後の十帖を宇治十帖といふ。蓋し舞台を宇治にとり、前篇の主人公の子等を以て主人公とする故であらう。

貴顯の人光源氏（又源氏の君）は前篇の主人公である。實は無上に尊貴な御境遇のところ、故あつて臣下に降られた貴顯中の貴顯である。才色艶絶至らぬ事もなき人物で、戀には殊の外冒險を好ませられた。數々のローマンスを作つた源氏の君は罪の裁斷を恐れるやうになり、自ら進んで須磨まで落ち延び、都より外へも出なかつた貴顯の人が、落寞たる夕の海に郷家を想つてゐる中に、夢の示唆を受けて明石に移り、明石上を得て暮す裡再び都に上り、

大切に待遇されるが、自らは却つて野心を棄ててやり過す事もなく、やがて出家をさへ願ふ心持になる。

この間源氏の君の競争者に頭中將といふ貴公子があつた。源氏の君には恰好の話相手、舞も管絃も源氏の君のお相手が勤まる程の巧者、終にはこれが戀の競争者にさへなつた。

草深い中に夕顔の白々と咲いてゐる途中の夕景色、この家の主人さへねたましく思はれて夕顔の花を所望する風流源氏の君は、はからずも夕顔の上をこゝに見出して、正妻の嫉妬を怖れて世間を忍ぶ佗住居をしてゐる事を知り、例のものの好きな心から愛の生活を始める。これが實は頭中將の元の想ひ人だつたのである。

柏木衛門督は又頭中將の男である。笛の極めて上手な殉情的な青年であつたが、源氏が朱雀院の切なる御依頼に依つて妻迎へした女三宮はこの殉情的青年の情熱に壓倒されて、女三宮の、せめてその愛猫でもいゝ、手に入れたいものと惱み盡したのは柏木である。この猫が簾を持ち上げて女三宮の姿を柏木に示し、柏木の心を一入燃え立たしめてゐる。罪の子を擧げて終ふ。これが後篇の主人公兼大將である。源氏は泌々と過去の報復を味つた。

以上源氏の君を中心とする幾多の人物の行動は、要するに平安城裡秦平を譎ひ風雅を盡しても、いゝあはれに世相を律したものである。このものゝあはれとはまことに平安時代の男女を通じて、世態の標準、處世の標的としたものであつて、ものゝあはれを解せざれば全く紳士淑女の仲間入りが出来なかつた。江戸時代にかの粹といふ一の標準が萬事を解決して、之を知らざるものは謂はゆる野暮と蔑まれたのと、形こそ異れ、共通の點が存在する。源氏物語の文章は、實に國文學中これに匹敵するものを見ない程のもので、その流麗優美なる點、洗練推敲をへた點、用意の周到なる點、筆路整然として前後の照應當を得、而も極めて自然的な修辭を以て景物を寫し、事を論ずるに

その妙を極むる所、ほとく感服せざるを得ない。構想亦千古に絶した作品で、よくもかゝる大作がこの時代に生れたものであると思はしめると同時に、式部の凡庸ならざる手腕に誰か感歎せざる者があらう。

作者紫式部は、當時の碩學藤原爲時の女で藤原宣孝に嫁し、一女賢子（世に大貳參位といふ）を擧げた。夫の宣孝が死んだ後、一條天皇の中宮上東門院に仕へて令名を一世に奔らせた。

參考書、河海抄（四辻善成）花鳥餘情（一條兼良）細流抄（三條西公條）岷江入楚（中院通勝）源氏物語湖月抄（北村季吟）源註拾遺（釋契沖）源氏物語新釋（賀茂眞淵）源氏物語玉の小櫛（本居宣長）源氏物語評釋（秋原廣道）新釋源氏物語（佐々政一等）源氏物語詳解（池邊義象、鎌田正憲）定本源氏物語新解（金子元臣）對譯源氏物語講話（島津久基）梗概、源氏物語忍草（北村湖春）新譯源氏物語（與謝野晶子）

猶寫本は從來一、青表紙本系二、河内本系の二流が交々行はれて今日に至つてゐる。

2 源氏物語以後

源氏物語以後源氏物語に追従する作品が多く現れた。

狭衣物語

夜の寢覺

濱松中納言物語

等、その今日に残れるものである。

狭衣物語は大貳三位の作とも襟子内親王宣旨の作とも言傳へられる。主人公の狭衣大將といふ貴公子が源氏の君

に相當し、才色優びなきこの貴公子が、源氏宮、女二宮、飛鳥井姫君等を相手に戀に惱む種々相を描いたもので、全く源氏物語を模倣した作品である。

参考書、狭衣系圖（三條西實隆）狭衣物語下紐（筆者不詳）寫本としては東本願寺本が最近發見されてゐる。

夜の寢覺は又よはのねざめとも云はれる。更科日記の著者たる菅原孝標女の作であらうと云はれてゐる。御物本更科日記の末に「よるのねざめ」の作者と日記の筆者と同一なる由が記されてゐる。狭衣物語と共に源氏物語を模倣して及ばざる事遠い作品であるが、大部闕卷があつて、今も全體の半分位しか見出されてゐない。やがて大臣の榮位につく中納言が主人公で、ねざめの君への戀愛の様相を骨子としてゐる。

参考書、窓のとしび（横山由清）校註よはのねざめ（藤田徳太郎、増淵恒吉）校本よはのねざめ（橋本佳）

濱松中納言物語は矢張り菅原孝標女の作かとも云はれる。濱松中納言が、己れの亡夫が唐の第三皇子に生れ變つてゐる事を知り、高陽縣の第三皇子にあふ事になるが、やがてその母と相愛の中となり一子を擧げる。後三年にして日本に歸り、吉野の唐后の母なる尼にあつて物語をし、又今は尼君となつて吉野に佗住居をしてゐる大姫君と暮して舊情を暖める。と云ふのが大體の筋で、荒唐な傳奇小説であるが、作中夢が多く、その夢の中に唐にゐて日本の大姫君等の事に想を苦しめ、日本に歸つては又唐后の事を想ふと云ふやうな現狀に住せずして常に心が二元的に動いてゐる點は更科日記を想はしめるものがある。これも闕卷のあるものである。近時尾上博士藏書の中から末巻と思はれるものが發見された。

参考書、雜誌國語と國文學第八十四號

落窪物語四卷も作者不明の物語であるが、繼子苛め物語の最初のものと考へられる物語で一人の女性が繼母の爲に片隅の一室を與へられて課せられる過重の仕事に苦しむのであるが、左近少將といふ貴公子に見出されてから幸福な身となり、且つ少將に依つて報復するといふのが筋で、滑稽な敘述も加味され變化にとんでゐる。但し、源氏物語及其の系列の物語の様な貴族趣味から遠ざかつて意志的な氣分、新興の意氣といふ様なところが認められる。或は今後問題にされる物語ではなからうか。

參考書、落窪物語註釋（大石千引）落窪物語頭書（賀茂眞淵）落窪物語大成（中村秋香）口譯落窪物語（鴻巣盛廣）

堤中納言物語も亦源氏物語等とは系列を殊にする物語である。十篇の短篇から成る物語で、特殊な傾向を示してゐるが、近時鎌倉時代の作であるとも云はれるやうになつた。

3 源氏物語以前

傳誦的性質から離脱して物語が文學形式として認容されたのはこの平安時代に於てであるが、それが源氏物語の如き大作にまで發展するに至つたその成長振は又怖ろしいものがあると云はねばならぬ。今その源氏物語までに到つた源流を考へる時に、それは又即ち物語の起源を想到せしめるものとなるのである。

伊勢物語

伊勢物語は在原業平の著であると斷定する事は出来ないが、業平を中心にしてその逸話を記述した歌物語であると云ふ事は出来る。世相に感じて咏んだ彼の詠歌が自然に物語をなしたのである。歌物語の特色は必ず歌を枕にするところに存する。短い歌の形式が何程記憶に便宜なものか、而して又その歌を枕にして記憶する物語が何程記憶

を容易ならしめるかを想像する時、書物の流布の少い時代なる物語發生當時の形式、即ち物語發生の型がこの伊勢物語の如き歌物語であつた事は否定出来る事ではない。而して是の如き歌物語は他にも多かつたであらうが、伊勢物語は現存するもの、中最古の歌物語である。

伊勢物語の持つ今一つの特色は傳奇的性質である。伊勢物語の名の由來は、多くある中で、伊勢國に關する説話が多いところから名づけられたものとする説が有力と思はれるが、伊勢物語・大和物語の伊勢・大和は王城を中心にする繪士淑女の間に傳奇的興味を具へたものと考へられるのである。

伊勢物語の有するこの二つの性質は即ち原始物語の二つの傾向であると考へられる。

この物語は斷片的な小説話が集められて、業平を中心にしてゐる。文章は簡潔で聰明で、齒切のよい文の中に情熱の奔るにつれて詠みなされた歌を枕に踏まへてゐる。業平とその歌を知らうとする人にも必ず参考にならねばならぬ。

參考書、伊勢物語拾穗抄（北村季吟）勢語臆斷（釋契沖）伊勢物語古意（賀茂眞淵）伊勢物語新釋（藤井高尙）伊勢物語詳解（鎌田正憲）伊勢物語講義（今泉定介）評釋伊勢物語（窪田通治）

寫本として最明寺本伊勢物語、傳良經筆伊勢物語等ある。

大和物語はその體裁全く伊勢物語に倣うたもので在原滋春の作かとも云はれる。何れの點からみるも伊勢物語に優るものではないが、歌物語として同様な性質を有するわけである。

參考書、大和物語抄（北村季吟）大和物語直解（賀茂眞淵）冠註大和物語（井上文雄）大和物語詳解（井上、栗島）

竹取物語

傳奇的傾向の勝つたものには竹取物語及び宇津保物語がある。而して竹取物語は最も古い物語として言傳へられてゐる。竹の中から輝き出た月界の一麗人を目懸けて、皇族や大臣が戀を得ようと狂奔するのであるが、姫は冷然と難題をもちかけて云ひ寄る男を疲れしめ、最後に大君の辭み難いお召し及びにあうて悲愁の情深く、夜毎月を見ては憂に沈むのであつたが、満月の夜天上の迎へ人に會うて悲愁の面持も俄に改まり、森嚴な月姫となつて昇天すると云ふのであつて、滑稽の分子も多く、漢籍佛典から得た文辭構想も亦少くない。但し當期の物語の中では行文最も簡素で制作年代も作者も共に全く不明であるが、初期の産物である事は疑ない。

參考書、竹取物語解（田中大秀）竹取物語抄（小山儀）校註竹取物語（佐佐木信綱）竹取物語講義（今泉定介）竹取物語全釋（岩田九郎）新譯竹取物語精解（谷川秀雄）竹取物語講義（井上頼文）

宇津保物語は錯簡があつて今以てその全貌を知る事が出来ないもので、多く最初に現れて來る俊蔭の卷のみ讀まれて來た。この卷藤原俊蔭が十六歳で渡唐し、波斯國に漂流して異人に琴の傳授を受け、或は阿修羅にあふ説話をど、荒唐であるが、物語の傳奇的性質が伊勢・大和から波斯國まで進展した點は一つの成長と見られる。

參考書、宇津保物語（細井貞雄）宇津保物語二阿抄（山岡、細井）宇津保物語考（安藤爲章）宇津保物語楷梯（小山田與清）

源氏物語は以上の諸書と白樂天等の漢人の著書から導き出されたもので、従つて歌物語としての要素も、傳奇物語としての要素も含まれてゐるのであるが、漸くその領域を脱して挿入の和歌は從位に立ち、荒唐な性質は全く影を消めて行き、伊勢・大和から唐・波斯へと所謂外面的に成長した傳奇的性質も、内面的なものとなつて僅かに須磨

明石の巻に傳奇的性質の面影を印する位になつてゐる。伊勢物語から大和物語を経て源氏物語へ、又竹取物語から宇津保物語を経て源氏物語へと進展した跡を見る時、源氏物語が如何に長大な傑作であるかを知り得るし、更に源氏物語以後の諸作が模倣の作多く、模倣に非ずとしても、濱松中納言の如き再び外面的傳奇的物語へと逆轉した事を思へば源氏物語の空前絶後の作たる事は自ら明かにされる次第である。

○日記紀行

日記が文學形式として認められ、日記の中に個性を認められるやうになつたのは矢張平安朝時代に於てである。日記に於ても紫式部を中心にして考へるならば紫式部日記一卷がある。

紫式部日記は紫式部が上東門院に宮仕した頃の記録で、中宮御懷妊の頃から後一條天皇及び後朱雀天皇の御誕生その他宮中生活の状態を記されてあるが、日記の一部には式部が自分の子弟に與へた消息文が攪入した形跡が窺はれる。即ち主として宮中生活を記述するのが眼目であつたもので、日記の最初の形式としては私的記述の要求以前に記録的要求があつた筈で、行事や慣例を書き留めておくのが最初の形式であつたらう。紫式部日記はさういふ面影を傳へる一面、風景描寫を試みたり、他人に對する述懐を試みたりして自由な個人的表現に及んでゐる。源氏物語の様に藝術的意圖を充分に示してはゐないが、猶源氏物語と併讀すべきであると思ふ。

参考書、紫式部日記傍註（壺井義知）紫式部日記釋（清水宣昭）紫式部日記解（足立稻直）紫式部日記評釋（永野忠一）紫式部日記講義（長田致孝）紫式部日記精解（關根正直）紫式部日記全釋（小室由三）

蜻蛉日記は右大將道綱母の筆に成つた日記である。天曆八年夫兼家が始めて通ひ出してから天延二年まで二十一

年間の日記である。夫を得てから絶えず失ふまいとする悩み、子が生れて以來の夫の疎遠な行動に對する怨恨を抱いて、ある時は門前を通り抜けて行く夫の車の音に耳を止め、ある時は鳴瀧に籠るなど、やるせない當時の婦人生活を描いたものである。このやうに記録的性質は全く脱離して、文學的表現の意圖を持つて記された日記が紫式部日記以前にあつたのである。彼と是と態度を殊にするもの故その間に進歩の發展のと云ふ事はいひ得ないけれども、日記の個性的文學的表現が源氏物語以前に存したといふ事は極めて意義深いものと思ふ。この日記も錯簡があるのは惜むべき事である。

參考書、蜻蛉日記解環（坂徹）

和泉式部日記は蜻蛉日記の系を引く日記で情熱の歌人和泉式部の奔放な戀愛生活の記述である。

參考書、新譯和泉式部日記（與謝野晶子）

紀行と云ふ名こそなかつたが、日記と云ふ名目に借りて紀行文も亦當期に現れてゐる。

土佐日記は延長八年に紀貫之が土佐守となつて赴任し、その地に五箇年を送つた後、承平四年に任充ちて京に還る時の紀行文であつて、冒頭に女人なる旨を裝うて書かれたものである。文體は純國文、藝術的價値を十分認めうる。行文何らの虚飾なく、任地土佐に失つた亡兒の述懐は全篇を通じて見える所であるが、風波につけて海賊の難を思ひ、徒然の餘りに滑稽を弄する邊り、輕快にして然も全篇壯重の意を失はざる處は流石に貫之の筆であり、よく凡手の及ぶところでない事が肯かれる。冒頭の「男もすなる日記と云ふものを女もしてみんとすなり」は、古來議論のある所であるが、要するに貫之が、この日記を草するに當つて一種の戲文として綴つたものと見たいが、

同時に讀者を豫想してゐたものであらう。

參考書、土佐日記考證（岸本由豆流）土佐日記燈（富士谷御杖）土佐日記船の直路（橋守部）土佐日記創見（香川景樹）土佐日記講義（今泉定介）土佐日記新釋（豊田八十代）校註土佐日記（鳥野幸次）土佐日記全釋（小室由三）

更級日記は菅原孝標女の作である。幼少の頃上總介となつて赴任するといふ父に伴はれて東國に下り、任解けて再び都に伴はれて歸る時（作者十三の時）から筆を起し、五十歳で夫橋俊通に別れて悲歎に沈むまでの日記で、その初の部分は紀行、後の部分は自叙傳、日記である。孝標女は一面自我の強いところもあつた様に見えるが、その筆は頗るつゝましやかで、幼時から昔物語に心を惹かれ、源氏を耽讀して浮舟の君に憧れた事や、文中夢の話の多い事など、筆者の幻想的な心情を窺ふ事が出来る。この日記は古來文章の順序が混亂して正しく讀む事が出来なかつたが、近時古寫本の發見に依て錯簡が明にせられた。

參考書、校註更科日記（佐佐木信綱）更科日記略解（關根正直）新釋更科日記（須田正雄）更級日記錯簡考（玉井幸助）更級日記新註（玉井幸助）更科日記（八波則吉）

○隨筆

枕草子

見聞に従ひ事に感ずるまゝを折に従つて清少納言が書いたもの、清少納言の枕草子は隨筆中唯一の名著で觀察發掘筆法頗る銳利、後人の模倣を許さないものがある。清少納言は歌人清原元輔の女で、元輔が少納言であつた爲に、その姓と官位をとつてかく呼んだのであらう。清少納言と紫式部とを比較すれば、式部は謹慎貞淑、才を内に蓄

へておもむろに出すといふ風であるのに反し、納言は才氣煥發、相手を得るにまかせて、即座にこれを品評し罵倒し、或は寧ろ才能に誇るといふ傾向さへもあつた。一は婦人の徳を具へて高風に生き、一は寧ろ男まさりの氣性を以て男子を腫若たらしめる風が見える。けれども納言の才學は、實に敬服に値するもので、枕草子の文章はいかにも齒ぎれがよく、きびくした處がある。

草子中或は公卿官媛のふるまひを評し、或は四季の光景を敘し、主觀に客觀に何時も奇拔な觀察を以て鋭い筆端に載せ來る所、作者の面目が躍如として窺はれる。然もその文をやる事特に簡潔で、謂はゆる體言止めの法を多く用ゐたのはこゝにも亦清少納言の面影を髣髴せしめる。

枕草子は異本が非常に多く、系統だけで五種にも及ぶほどである。参考書としては枕草子抄（萬歲抄）（加藤盤齋）枕草子春曙抄（北村季吟）枕草子通釋（武藤元信）枕草子詳解（松本靜）校註枕草子新釋（永井一孝）枕草子評釋（窪田空穂）枕草子詳釋（金子元臣）枕草子通解（金子元臣）枕草子全釋（栗原武一郎）

○雜 史

こゝに雜史といふのは大鏡・榮華物語などである。

大鏡は史記の體裁に倣うて書かれたもので、その純粹な國文は筆路頗る勁拔、記事もまた繁簡よろしきを得て居る。榮華物語も殆ど同時に生れたものであるが、大鏡に比べれば何となく冗漫の點が多い。兩書共に藤原氏の榮華を寫し、關白道長を中心として、その周圍を微細に描き出した點は同様であるが、榮華物語の徒らに道長の權勢を謳歌して居るに對して、大鏡は幾分批判的な態度を以て叙してある所に相違がある。もとより空想を交へない歴史

物語で、この兩書は共に世繼物語の別名がある通り、代々の出来事をつぎつぎに書き進んだもので、世繼といふ名詞は當時、今日の歴史といふほどの意味に用ゐられてゐたものであらうと思はれる。古事記はしばらく措き、日本書紀以來の國史は皆漢文で記すのを本體としてゐたが、國文流行のこの期に至つて、こゝに始めて國文體の歴史を得た事は、これまた物語の場合に見たと同様、平安時代文學の一特徴である。

榮華物語は宇多天皇の寛平年中から始めて、村上天皇以後の事を録し、堀河天皇の寛治六年に至る二百餘年間の記録である。卷數凡て四十帖、一帖毎に風雅な卷名を附してある事は源氏物語のそれと等しく、作者は赤染衛門と稱されてゐるが、明らかではない。

參考書、榮花物語詳解（和田美松、佐藤球）新譯榮花物語（與謝野晶子）

大鏡は後一條天皇の萬壽三年、雲林院の菩提講で、百五十歳になる大宅世繼といふ人と、百四十歳になる夏山繁樹といふ人とが相會うた事に筆を起し、兩人の談話に事よせて、文徳天皇の嘉祥三年から萬壽三年まで百七十六年間の事蹟を記したものである。中に帝王の本紀と大臣の列傳とを分つた所は、曩に述べた史記の體裁に倣うたのである。作者は藤原爲業といふ説があるが、これも明かではない。

參考書、大鏡短觀抄（大石千引）校正大鏡註釋（鈴木弘恭）大鏡詳解（落合直文、池邊義象）大鏡新註（關根正直）大鏡詳解（佐藤球）口譯大鏡（芳賀矢一）

二、歌 謠

既述の通り漢文學は嵯峨天皇の弘仁年間を中心として隆盛を極め、その結果國文は一時影をひそめた様に見えたが、その反動として清和天皇の頃から韻文、殊に和歌復興の機運が旺盛となつた。これは全く漢文崇拜に對する國民自覺の結果に外ならぬ。此の時代の歌人には

僧遍照 文屋康秀 僧喜撰 小野小町 在原業平 大伴黑主

など有名で、世に六歌仙と稱せられ、後の古今集時代當時の歌人に比較して概ね放恣な詠風である。

次で宇多天皇の寛平頃からは益々和歌の道が興隆して、貴族の子弟、後宮の才媛、みな和歌を詠じ月雪花を樂んだものである。これらの人々の間に遊戲的の諷詠が行はれるに至つては、題詠——題を出してその題のもとに歌を詠すること——が流行し、轉じて歌會——當時の所謂歌合——が催され、遂には判を決すると云つて優劣を論じたりして、上代歌謡の様に事物に觸れてその刹那の實感を詠するといふ分子が尠くなつた。

さて醍醐天皇の延喜時代に及んでは益々和歌が盛になつて天皇も亦此の道に大御心を傾けさせられ、此に始めて勅撰集といふものが出來たのである。即古今和歌集である。次で村上天皇は和歌所を禁中の梨壺に設けさせられ時の歌人を集めて萬葉集の研究をせしめられた。同時に同じく勅令を以つて後撰和歌集を撰ばしめられ、以後宮廷と和歌との間に離る可からざる關係が生じ、この以後この期に勅撰集の編まれたものは五部に及んだのである。因に梨壺に於ける

萬葉集の研究は今日全く疏らないけれども、此の當時すでに萬葉集が種種解釋のものとなつてゐた事は想像がで
きるので、萬葉時代を去る事餘り遠からざる此の研究が通つてゐたならば萬葉集には更に便宜を得た點である。

此の如く和歌は非常な勢を以て平安朝の貴族社會に流行したのであるが、同時にその流行は一面束縛となり範疇を招いて歌の方式といふものがやかましく云はれる様になつた。所謂歌學歌論である。上代は人も詞も素樸である

から方式の必要などはなかつたのであるが、世中が複雑になり人智が多様に恆るに従つて段々と或意味の束縛を加へられるのは何れの道も同じである。是は平安時代の貴族がその勢力闘争の爲に黨同伐異を事としたと同様に、和歌の上にも亦各門戸を立てて他人の入るを好まない風を生じた。これが甚しくなつては遂に一種の歌の模型に依つて作り出される機械的技工に近いものとなつて了つたとも云ひ得る。藤原公任の新撰髓腦及和歌九品、源俊賴の無名抄、藤原基俊の悦目抄、藤原清輔の奥儀抄、袋草子の如きは何れも或は歌語を説き、品等を附し、或は和歌の形式に及び逸話に及ぶ等の書である。

上代は謠ふ歌と讀む歌と一致したが當代になると分化的傾向を帯び、讀む歌は和歌連歌となり、謠ふ歌として今様・催馬樂・朗詠などが發生した。

○連歌

連歌は強ひて云へば上代に起原を持つと云はれない事もないが、稍唐突である。先づ當代頃から行はれたと見るのが、穩當であるが、それも下の句上の句下の句上の句……と長く連ねて一聯としたのは後の事で、先づ單連歌と稱して二人の人が一首の歌の上句と下句とを附合せるのであつた。例へば

人心うしみつ今は頼まじよ 女

夢に見ゆやとねぞ遇にける 良岑宗貞

の如きもので、自由で滑稽を旨とした。

○今様

今様は七五音節の聯句四句から成るもので、その名稱から考へても舊態を破つて新しい試をなしたものであつたらう。

蓬萊山には千歳ふる 萬歳千秋重れり

松の枝には鶴巢喰ひ 巖の上には龜遊ぶ

の如きもので、矢張自由で軽い味のもので詞も素樸直截である。

○催馬樂

催馬樂は俗謡を唐樂の律呂に合せて謡うたもので當時上流の人々も遊宴に際して餘興として謡つたらしい。

飛鳥井に／＼ 宿りはすべし 影もよし 御水みづも清し 御馬秣まぶもよし

○神樂歌

神樂歌は神祇を祭る時に謡うたもので、その起原は古いが思想も形式も單純なものである。

本 此のさゝは いづくのさゝぞ とねりらが こしにさがれる ともをかのさゝく

末 さゝ分けは 袖こそやれめ とね川の 石はふむとも いざ川原よりく

○朗 詠

朗詠は詩賦・和歌に曲節をつけて吟じたものである。藤原公任の和漢朗詠集、藤原基俊の新撰朗詠集が編まれてゐる。

○ 郎 曲

野曲は催馬樂・朗詠・今様の總稱である。

猶催馬樂は藤原師長の仁智要録、天治二年寫の催馬樂抄、源有俊の神樂、催馬樂略譜建久四年催馬樂笛譜等に傳へられ、神

樂歌は近衛公爵家藏の神樂和琴秘譜に出て、今様は梁塵秘抄に、連歌は和歌集の中に求められる。

○短 歌

1 古今和歌集

古今集は醍醐天皇の延喜五年（紀元一五六五）紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑らが勅を奉じて撰んだもので萬葉集に入らなかつた古歌とそれ以後の名歌又編者らの自詠などを載せてある。全部二十卷、部立は四季・賀・離別・霸旅・物名・戀・哀傷・長歌・旋頭歌・俳諧歌などに分類せられ、歌の總數は千百餘首ある。而してその内容は萬葉集に比して儒佛二教の思想がよく融合せられて、殆どそれが日本化した様に現れてゐる事と、雪月花の風物を主とし、もしくは男女間の戀愛を抒べたものゝ多い事に注意される。

思ひ出て戀しき時は初雁のなきて渡ると人知るらめや 大伴黒主

よそにみてかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも 僧遍照

思ひ兼妹がりゆけば冬のよの川風寒み千鳥なくなり 紀貫之

等概していへば古今集の歌は流露した感情を反省し曲折してそれを直接に表現せず、刹那の感動から理智的時間的に表現してゐる。又その形式も三句切が多くなつて、一首全體に強さを與へずして輕さを與へて居る。所謂五七調から七五調への推移である。集中の歌人はその數非常に多いのであるが、六歌仙を始め、在原行平、素性法師、伊

勢等出色の人物であり、四人の撰者も亦名歌の作者である。而してその尤も傑出したものは業平と貫之とであらう。在原業平は平城天皇の皇子、阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女伊登内親王で兄行平と共に在原の姓を賜つて人臣の列に降つたのである。官に仕へて近衛權中將に進んだから在五中將とも云ふ。當時藤原氏の一門は榮えに榮えて自餘の門族は皆その後塵を拜するに過ぎない有様であつたから王家の出たる業平兄弟すら常に轆轤不遇に過ぎざるを得なかつた。殊に業平はその妻女の姻戚に當る惟喬親王が文德天皇の第一皇子であらせらるゝに拘らず皇儲の位にも立ち給はずして、洛北小野の山莊にわび住して居られるのを見ては、多情多恨、感激性に富める業平の性質として同情の念やみ難く心は何時も鬱々として居たに相違ない。後世業平といへば、すぐにのつべりとした色白の美男子を想ふのが例であるが、實は單なる風流貴公子ではない。寧ろ世俗の浮華輕佻に流れ行くのを慨するの餘り、皮肉の行動に出たものであらうとさへいひ傳へられる。

その歌は苦心もいらす練磨もなく、天真の流露にまかせて感ずるまゝに歌ひ出したものである。全く天成の麗句であつて「心餘りて詞たらず」と評される所以であらうが、餘韻の深さ艶麗の想に接する時彼を目して大詩人となすに異論はないと思ふ。

紀貫之、父は望之、祖父は長谷雄。歌人と學者とを出した家に生れて、延喜中越前少掾、御書所預となり、後土佐守に進んだ事は、その著土佐日記に見えてゐる。木工權頭に昇つて従四位下に敘せられ天慶九年(?)生を卒つた。

その性質は才氣煥發といふよりは寧ろ孜孜として止まずといふ方であつたらしく、その作歌態度は一句一語も推敲熟慮をへなければ發表できないと云ふ有様で、つとめて想と詞とを合致せしめた跡が見える。恰も自由奔放な業

平とは正反對で貫之は穩健雅正を特長とし、業平は天真爛漫を特色としてゐる。

歌には家集があり、散文には古今集序、大堰川行幸和歌序、土佐日記等があり、古今集序には特に歌道に對する彼の抱負が吐露されてゐる。蓋し謹嚴な態度を以つて歌道の興隆を希うてゐるのである。

その他奇智を弄して技巧的な歌を残した僧遍照がある。俗名を良岑宗貞といひ桓武天皇の皇孫である。仁明天皇に仕へたが、その崩御の後哀痛に堪へず、遂に叡山に入つて剃髮した。又婉麗纖弱な調を以て華やいだ心を歌つたものに小野小町がある。傳記は詳かでないが、「あはれなるやうにて強からず、いはゞよき女の惱める所あるに似たり」と貫之に評されてゐる。沈潜的な情熱を洗鍊された智性にかくまつた凡河内躬恒は寛平年間に甲斐權少目となり、後年和泉權掾となつた。貫之と相伍した撰者の一人である。行平は矢張り情熱の歌人、菅原道眞は眞率な情念を直截に歌はうとし、文屋康秀、壬生忠岑は頓才を理想とし、友則は眞面目に、伊勢は内氣に表現されてゐる。

古今集の寫本としては三井家の元永本最も古く、藤原定家の筆寫と傳へられる嘉祿本、貞應本等があるが、貞應本が久しく用ゐられた。又貫之自筆の本と傳へられる一部の寫本がある。参考書には古今余材抄(僧契沖)古今集打聽(賀茂眞淵)古今集遠鏡(本居宣長)古今集正義(香川景樹)古今集詳解(中村秋香)古今集評釋(金子元臣)古今集新釋(佐佐木信綱)口譯對照古今和歌集(安田、池田)綜合古今和歌集新講(三浦圭三)

2. 古今集以後

古今集の撰進は確かに和歌の興隆促進の氣運を助長したといふべきで、之に倣つて勅撰の和歌集は續々と撰ばるるに至つた。今この期間にできた勅撰集とその撰者とを掲げると、

○後撰集 源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城

○拾遺集 藤原公任

○後拾遺集 藤原通俊

○金葉集 源俊賴

○詞花集 藤原顯輔

○千載集 藤原俊成

である。右のうち古今・後撰・拾遺の三集を呼んで三代集といひ、之に後拾遺以下の四集及び次期のはじめに成つた新古今集を加へて八代集と稱する。以下順次略説する。

後撰集は古今集撰後四十六年を経た村上天皇の天曆五年、天皇自ら源順等を召され萬葉の研究をなさしめられた序に出来たものである。古今集と同様二十巻で部立も略々同様である。その内容は古今集に漏れたもの及び古今集以後のものを撰び集めたもので、作者もほとゞ古今と相似て居るが、この集は撰擇の趣旨として、歌の姿即ち歌詞の整調に重きをおくといふよりも、心即ち思想を本とした爲に體裁も古今集ほど整然たるものがない。

拾遺集は一條天皇の朝に藤原公任が撰んだものと傳へられて居る。選擇の方針は、歌詞を主とした所、古今集に倣うたのであらうが、而も古今集には及ばない。

その他の勅撰集は何れも大同小異特に云ふべき節もない。凡てこれやがて生れ出るべき新古今集への過程にあるもので、古今の風は後拾遺に一轉の兆あり、金葉に再轉し、千載に三轉して新古今に及んでゐる。

當時の歌人に、特記すべき人々は曾根好忠、藤原公任、源俊賴、藤原俊成の四家であらう。なほ大中臣能宣、源順、平兼盛、清原元輔、源經信、大江匡房、藤原顯輔、藤原基俊、紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門、相模、大貳參位、源賴政、平忠度、西行法師がある。

好忠は官位卑く、性狷介、而も歌壇の革新を以て自ら任じ自ら高うして人を容れず、ために又世の容れる所とならずして一生を不遇に終つたが、その作歌の上には因襲と形式とを打破して清新の氣を求めようとした餘り、取材、用語、手法に珍奇なものを採入れ過ぎた感がある。勿論時流に背いた結果としてその報いられた所は只嘲笑に過ぎなかつたのであるが、その志は後の經信、俊賴父子に依つて繼承せられ、ひいては新古今への道程を辿る素をなしたものと見る事が出来る。

公任は小野宮太政大臣藤原實賴の孫で世に四條大納言と呼ばれた。學和漢に互り、諸藝一として通ぜざるなく、その筆蹟の妙は殊に今も尙世人渴仰の的となつてゐる。歌風は穩健優雅みやびた大宮人の典型を思はしめるものがある。而してその長所は寧ろ歌論に在つた。その著新撰髓腦及び和歌九品は貫之の主義を承けて更に一步を進めたものである。

俊賴は公任と同時代の源經信の子である。資性寛潤、頗る多藝多才の人で堀河、鳥羽、崇徳の三帝に歴任して從四位上、右近衛少將まで進んだ。父經信の試みた新體を大成したのは彼で、前代好忠の唱へた事と主唱は同じであるが、時代の要求に巧に投合したところは、その特長と見なければならぬ。然しその詠歌に於ては苦吟の人で熟慮改削後始めて人に示したといふ事である。着想新奇歌詞溫雅の評があるのは蓋し當つてゐる。

俊成は御堂關白道長四世の孫で、皇太后宮大夫まで進み、後剃髮して釋阿と號した。多少霸氣もあつた人で、當平安末期の歌壇は全く形式に捉れて一方にあくまで舊套を守らうとする者がある中に、一脈清新の氣風が動き、而も兩々相混亂して據る所を知らなかつた觀があるのに、又當代は院政久しきに互つて源平兩氏革新の旗風がまさに靡かんとする時であつたから、その師基俊の定めた舊例、古格を守つてはゐるものゝ、全くこれに泥む事をせず、一面には新しい調を叫んでよく兩派の長を採り、紛亂を一舉に鎮定し了つた快腕はまた偉なりとせねばならぬ。彼九十の長壽を保ち、一代の先達として、はた天下の判者として世の尊信を一身に集めたのは、眞に歌壇の壯觀であつた。その子定家は次期に於て傳統の家學を一層流布したのである。

和泉式部は越前守大江雅致の女、和泉守橘道貞の妻となつて小式部を生み、後一條天皇の中宮上東門院に仕へ、麗に丹後守藤原保昌の妻となつた。才色雙絶、多感多情、實に平安時代の女子の特質を一身に有してゐたといふ事が出来る。その歌は自由奔放、實に成るがまゝにして成つたものである。謂ゆる天成の歌人で、此の點は頗る業平に似た所が多い。

その他赤染衛門、紫式部、清少納言等女流歌人も多い。

西行法師。平安末期の社會思想界に變動が少かつた爲に歌風に於ても、ともかく新奇の趣があらはれかねてゐた事は藝に述べた通りであるが、これまでに論じ來つた諸家は何れもその時代の風潮に左右せられて、只僅かに形式上、繊細の技を弄し、華麗の調を成したと云ふに過ぎない。それは同じ時勢に同じ宮殿を中心とした生活の齋す處である。

然るにこゝに全くこれらの人と生活を異にし、物に感じては赤心を吐露し、事に感じては自由自在な詩才を發揮した歌人に西行がある。西行は俗名を佐藤義清といひ、もと武門の人、後鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、上皇の寵遇を受けたが世をはかなんで出家し、風月を友として四方を周遊した。これが平安京の小山川に想をやつて居た堂上者流と異るところで、その天稟の才は、佛教の素養と相應じて實に深遠の詠吟をなしたのである。その家集を山家集といふ。(伊藤伯衡家傳の西行上人家集、藤岡博士紹介の異本山家集等の謄本がある)

結 語

以上平安時代の文學を通觀した事となつたが、なほ詳細に互つては論ずべきものが、頗る多いのである。但しその代表的なものに就いてはほゞ一わたり説いて來た。

要するにこの時代は國文學の上に花々しい匂と光とを發した期間で、我國文學史上、この時代と後の江戸時代とは、まさに兩々相對立した文藝的時代である。それは一面また現實に即せず理想の光明に奔せた時代であるとも云はれよう。然し徒らに過去を追懷してその榮光を顧みた時代とは内容に於て異なるものがある。由來藝術的の產物は、同じ情緒の動いた江戸時代に最も多く研究せられてあるから、以上の各文學を理解しようとするには勢ひ江戸時代の國學者の研究によらなければならぬ。



昭和八年十月二日印刷
昭和八年十月七日發行

日本文學講座 第一卷

編纂者 山本 三生

發行者 山本 三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾 一雄

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

發行所 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座 東京八四〇二番

電話芝(43) 自一一二一番
至一一二四番

(兩角紙本)